

『雨乞いの数珠』

昔、能登の国中が「百日日照り」といって、夏の間、雨が一粒も降らなかった時のことです。七尾の近在、三十力村のお百姓さんたちは、雨が降るのを待ちきれず、飯川の光善寺の法印さんの所へ行って、



「八田の蛇（じゃ）池で、どうか雨乞い（日照りの時、雨が降るように神仏様に祈ること）をして下さい。」

とみんなで頼みました。

蛇池は、八田の山奥にあり、昼でも薄暗い池でした。昔から大蛇が住んでいるという言い伝えがありました。法印さんは、お百姓さんたちの話を聞いて、さっそく、みんなと一緒に蛇池へ行きました。そして、祭壇を設け、断食をして身を清め、一心不乱に雨乞いのお祈りを始めました。

ところが、一週間目の満願の前日、法印さんは、誤って池の中へ大切な雨乞いの数珠を落としてしまったのです。さあたいへん、法印さんは、すっかり困って数珠を拾うために池の中へ入ろうとしました。お百姓さんたちは、驚いて、

「この池は、底なし沼だと聞いとります。そんな所へ入ったら生きて帰れんでしょうから、どうか、数珠のことはあきらめてくださいませ。」

と一心に頼むのですが、法印さんは聞き入れず、

「この数珠は、光善寺に代々伝わる寺宝なんじゃ、だから、わしの命に代えても、取り戻さねばならんのじゃ。」

と言って、そのまま池の中へ入っていかれました。

お百姓さんたちは、どうしたらよいか分からず、その場に立ちすくんで震えていました。しばらくたって、池の中から法印さんが姿を現し何事もなかったように、ニコニコしながら帰ってこられたのです。見れば、法印さんの手には、落とされたはずの数珠がちゃんとかかっているではありませんか。お百姓さんたちは、胸をなでおろして法印さんの前に駆け寄って行きました。

法印さんは、みんなをぐるりと見渡して、

「池の中は、思ったより浅かったのじゃ。まず、下へ降りる階段があつてな。そこを降りていくと、途中に木の株があるのじゃ。ふと、その上を見ると、運よく木の株の頭に、この数珠がのっかっていたのじゃよ。」

と話されました。

底なし沼であるはずの池ですから、お百姓さんたちが、半信半疑でいると、法印さんは、急に声を落として、

「実は、階段だと思つたのは、大蛇の背中であつたのじゃ…。また、木の株のように見えたのは、大蛇の頭だったのじゃよ。」

お百姓さんたちは、ゾーッとして、目の前の青黒い池を見つめながら、震えが止まらなかったような。そして、この法印さんは、なんと尊いお方であろうと、みんなで法印さんに向かって合掌しましたと…。

さて、いよいよ、その翌日、満願の日になると、大雨が降り続いて、七尾の町中が水浸しになりました。雨乞いのおかげで、三十カ村の田畑はいつぺんに潤い、その年は大豊作になったそうです。お百姓さんたちは、そのお礼にと、みんなで相談して「大般若経六百巻」をお寺へ寄進しましたとき。そのお経は、今も、光善寺に全巻残っておるような。

(八田町伝承 話 垣内文松 文 守沢 政治)

→